

# Case Study

支部ケース・スタディ

中国支部

## オリジナルの地域発信ドラマに挑戦

### Kビジョン(株)



Kビジョン 社屋

放送制作部 部長

宗森 達司



### 地域発信ドラマ『たべものがたり 元木食堂』

地元飲食店を舞台にさまざまな人間ドラマが交錯し、クスッと笑えて時々泣ける1話完結型ドラマ『たべものがたり 元木食堂』は、Kビジョン初の自主制作ドラマとして2020年4月から放送をスタートさせました。舞台となるのは、おしゃれなカフェや地元の常連客でにぎわうパン屋、隠れ家的な雰囲気のと食店などすべて地元の飲食店。見ているだけでお腹が空いてくる美味しそうな料理がドラマの見どころのひとつです。そして、主演をつとめる俳優・元木行哉さんが、毎回異なる役で登場するのもこのドラマの魅力。初めてのデートで食通ぶるイケメン、妻に出て行かれた元ミュージシャン、自己顕示欲の強い作家等…個性的すぎるキャラクターから目が離せません。グルメ情報と人間模様が絡み合う新感覚ドラマとして月替わりでお送りしています。



主演の元木行哉さん。さまざまな役で出演

### 地元でつくるドラマ

現実にはあり得ない、でもなぜか共感できる。独自のユーモアを盛り込んだ物語を生み出しているのは、このドラマで脚本・演出をつとめ、作家・俳優としても活躍中の室積 光さんです。室積さんは弊社の放送エリアである山口県光市在住。『たべものがたり 元木食堂』は、室積さんと食事をご一緒した時に「地元の飲食店を紹介するドラマがあったらおもしろいよね」という何気ない話がきっかけとなり、実現に至りました。ドラマの根底には「放送をきっかけに店を訪れるお客さんを増やしたい」という室積さんの思いがあり、脚本に合わせた店を探すのではなく、舞台となる飲食店を決めてから脚本を書くというスタイルで、毎回その店の歴史や料理に関する豆知識を盛り込み、その店でしか描けない物語になっています。主演をつとめる俳優の元木行哉さんも、弊社の放送エリアである下松市在住です。大阪出身で、10代の頃から東京を拠点にテレビや舞台で俳優活動をしていましたが、2019年4月に下松市への移住を決断。現在弊社の番組で映画紹介コーナーを担当して頂いているほか、リポーター・ナレーターとしても活躍されています。ドラマの放送が始まったことで、地元ファン(特に女性)を確実に増やしています。



脚本・監督の室積光さん



第1回目放送 「発信キッチン」での撮影風景

### ドラマならではの役割

テレビ番組の制作に多くのスタッフが必要なように、ドラマ制作にもさまざまな役割があります。『元木食

『元木食堂』では脚本を担当する室積さんが監督をつとめますが、監督の意向に沿ってスタッフに指示を出すのがディレクターです。店探しやアポイント、撮影までのスケジュールやスタッフの業務管理などを行います。撮影に携わる技術スタッフとしてカメラマン、撮影補助、音声、照明。ほかにもドラマならではの役割として、出演者の衣装の管理や撮影に必要な小物を準備する美術、ドラマの中で出てくる料理(どの場面にもどの料理が出るのか、どの程度食べて減らしていくのかなどを管理する)や人の流れなど、撮影の様子や内容を記録するスクリプター、エキストラの管理やスタッフの食事などを準備する制作、ドラマ撮影の裏側を記録するメイキングなどがあります。どの役割が欠けてもドラマの制作は成立しません。弊社の放送制作部には10人の社員がおり、ディレクター以外の役割は交代で担当します。ドラマの撮影日であっても、ニュース取材やニュース番組の収録はあるので、誰がどの役割を担当しても撮影がスムーズにいくように、スタッフを固定化しないことが必要だと考えています。



タイトルの出し方にもこだわりが

## きっかけとなった映画制作

ニュースや情報番組とは全く異なる“ドラマ”の自主制作を実現できたのは、これまでに映画制作に関わり培ってきた技術と経験・人脈があったからです。弊社が本社を置く下松市では、2013年に市の委託を受けて観光事業を行なっている民間企業が下松フィルム・コミッションを設立しました。弊社は下松フィルム・コミッションによる映画製作実行委員会のメンバーとして、設立当初から撮影機材の協力をはじめ、撮影スタッフとして映画制作に参加し、これまでに6本の作品に関わってきました。現在『元木食堂』で主演をつとめる元木行哉さんとの出会いもこの映画がきっかけでした。2012年に制作したドキュメンタリー映画「OYAKO」で主演をつとめた元木さんが撮影のために下松市を訪れたことが縁となり、交流を続ける中で元木さんご自身が下松の風土やそこに住む人たちに惹かれて移住を決断されました。弊社のニュース番組へのレギュラー出演や番組制作業務など、移住後の仕事にある程度の見通しが立ったことも移住の実現につながっていると思います。テレビとは違う映画制作の現場で、私たちは大きな刺激を受けました。映画をきっかけに、弊社では映画撮影でも使用されているカメラを導入し、その特性を生かした撮影や番組制作を行なっています。また、自治体と共同でプロモーション動画を企画・撮影するなど、ケーブルテレビ局として地域に貢献できる事業の幅も広がったと感じています。この経験がなければ『たべものがたり 元木食堂』が生まれることもなかったでしょう。



撮影スタッフ

## 新型コロナの影響

2020年春。記念すべき第1話が完成し、ほっとしていた頃、世界で猛威を振るった新型コロナウイルスは『元木食堂』にも影響を及ぼしました。第2話の撮影が決まっていた飲食店が新型コロナウイルスの影響で一時的休業することになり、その店での撮影延期が決定。目に見えないウイルスの脅威から、ドラマの制作そのものに不安を感じる社員も出てきたため、全員で『元木食堂』を継続するか、中断するかについて話し合いを行いました。全員で出した答えは「こういう時だからこそ万全の対策をとって制作を続けよう」というものでした。



コロナの影響で第2話は急遽テイクアウト(パン屋「ますぱん」)に変更し、公園で撮影

当時、多くの飲食店が営業時間を短縮したり、休業の決断をしたり、店によっては閉店に追い込まれたりしている時期でした。地元飲食店を盛り上げたいという思いで放送をスタートした『元木食堂』を今、中断するわけにはいかない。ドラマを放送することで元気を届けたい。会議ではそんな熱のこもった意見が飛び交いました。私たちはテイクアウト専門の店に絞って撮影交渉を行い、室積さんには一から脚本を書き直して頂きました。エキストラの人数や当日の撮影スタッフも最少人数に抑え、店内での撮影は常に換気を行い、ほとんどの撮影を屋外で行う演出に変更しました。出演者も含めて関係者全員に毎日の検温を徹底してもらい、撮影当日もこまめな除菌を行いました。第2話の舞台となったのは、オープンから1年も経たない家族経営の小さなパン屋でした。不安はあったと思いますが、最終的に快く撮影を引き受けてくださいました。ドラマの放送は5月で、大型連休の間は一時休業されていましたが、営業再開後は「ドラマを見てお店に来たというお客さんが増えた」とうれしい報告を頂いています。その後も店の選定をはじめ、撮影現場での予防対策を徹底して新型コロナウイルスへの対応策を講じ、毎月更新のペースを崩すことなく『元木食堂』の放送を継続しています。

## 新しい「地域貢献」のかたち

『元木食堂』では元木さんと一緒に芝居をする出演者、さらにエキストラも地元の一般の方がほとんどです。ご協力いただく地域の方の存在こそが、このドラマを支えています。長年芝居を続けてきたという方、未経験だけど演技力がピカイチ！な方など新しい発見も多く、月替わりで毎回違った場所、物語でつくるドラマは、人材発掘の機会にもなっています。「この人にぜひこの役を」と脚本の室積さんから指名があることもあり、手探りながらも地域のひとと一緒に番組を作れているのだと、手応えを感じています。取材で培ってきた人脈や地域のひととの関係性を、ドラマ制作に生かすことができているということは私たちの大きな励みです。また、自分の地元でドラマを作っているということが、地域の人たちにとっての喜びになってほしいと願っています。それが実現できれば、ケーブルテレビ局としてこれまでとは少し違った、新しい地域貢献の形を築くことができるのではないかと思います。

## 今後の展開

映画制作での経験があるとはいえ手探りで始まったドラマ制作は、ようやく軌道に乗ってきたと感じています。「毎月楽しみにしている」「何度見てもおもしろい」など、弊社で制作する番組の中でも視聴者からの反響が大きい番組になりました。今後はドラマ制作の裏側について出演者やスタッフ・地元飲食店のみなさんが語るトーク番組の放送や県外での撮影も検討しています。『たべものがたり 元木食堂』は2021年3月の放送が最終回となる予定ですが、室積さんや元木さんのような才能溢れる地元の方々と、この1年でさらにパワーアップした社員たちと一緒に、またワクワクするような新しいことにチャレンジできればと考えています。ケーブルテレビだからできること、地域のためにできることを番組制作に反映して、地域のみなさんに楽しんで頂けるコンテンツをこれからも届けていきたいと思っています。



出演者やエキストラは地元から発掘



地元の高校演劇部のOGも出演



主題歌を歌う「いーどし」の二人